

専門学科の現状と課題に関する調査

— 公立専門学科高校の校長等調査から —

南 本 長 穂

1. 問題の所在と研究のねらい

現在の高等学校は、1948（昭和23）年に制度化された。学校教育法第50条では、「高等学校は、中学校における教育の基礎の上に、心身の発達及び進路に応じて、高度な普通教育及び専門教育を施すことを目的とする。」と定める。つまり、普通教育をおこなう普通科と専門教育をおこなう専門学科が2つの柱であった。なお、1995年度に最初の入学生を迎えた第3の学科と呼ばれる総合学科の創設があった。

周知のように、戦後発足した新制高等学校は、旧制中学校、高等女学校、実業学校等を基礎に発足している。単純化して言えば、普通科は戦前の旧制中学校や高等女学校を、専門学科は実業学校を基に発足したことが多い。

発足以降、中学校からの高等学校への進学率は、60年代の高度経済成長期に急速に上昇し、70年代、80年代になると高等教育機関（大学・短期大学）への進学率も次第に高まった。すなわち、高等学校は多くの生徒にとって最終学歴を取得する機関ではなくなった。そして21世紀に入ると高等教育機関への進学率は高校卒業者の半数を超えるまでになった。高校生にとって、高校卒業資格は職業への入り口ではなく、大学・短大あるいは専門学校への進学のための階段としての役割に変化してきた。

例えば、平成26年3月時点での就職の状況をみると、全日制高校卒業生（1,023,757人）に占める就職者の比率は、17.1%と低い数値である¹⁾。ちなみに、大学・短大等への進学者の比率は、54.7%、専門学校への進学者の比率は、17.0%である。さらに、学科別の卒業者に占める就職者の比率をみると、最も就職者の比率が高いのが、工業科65.0%、ついで、水産科63.8%、農業科53.5%、福祉科52.6%の順であるが、他の学科は50%を下回る。すなわち、商業科42.2%、家庭科38.0%、情報科23.8%、看護科3.9%である。ちなみに、普通科のそれは7.9%、総合学科26.3%である。

こうした専門学科の卒業が即就職となっていない状況をどう理解すべきなのか。例えば、職業的な専門教育をおこなうのが専門学科なのだから、卒業後は当然就職を前提と考えるべきではないかとか。あるいは逆に、専門学科での学びをさらに深めいっそうの専門的な知識や技

術を学ぶために大学等の高等教育機関への進学はまた当然のことではないかとか。こうした論議は、制度（財政）的なレベルから個人的な進路選択のレベルまでさまざまに論じることができよう。まさに専門学科のあり方とそこで学ぶ高校生の現状を反映した論議である。

しかし、専門学科で学んだことを就職時にどう活かすのかとか、学びをさらに深めるためにさらに大学等へ進学するのかという論点以外にも、専門学科の教育の働き（機能）については、今日多くのことが指摘される²⁾。その代表的なものを、以下に列挙してみる。

1つに、中学校から専門学科高校への進路選択にかかわる問題があろう。入学した専門学科の教科・科目に興味や関心を持ってない生徒がいることとか。高校に入学したとしても、専門教育に不適應であり、たとえ一定の興味を持ってても、卒業後の進路意識が明確にならず、進路選択が困難な生徒がいることなど。

2つに、今日の複雑化する社会生活の中で、個人の価値観の多様化も進み、個人の生き方と職業生活の送り方を関連づけることが必ずしも容易でない状況が生まれていること。すなわち、技術革新や情報革新が進み、新しい職種が増加し、その働き方も多様化していること。

3つに、職業構造の変化がある。すなわち、学歴意識の浸透や大学等への進学率の上昇から、専門学科の卒業だけでは希望する職種への就職が困難になってきている。高卒の職種が大卒の職種に変わりつつある職業社会の現実がある。

4つに、専門学科を支えてきた公的な財政的基盤の変化がある。21世紀に入り、地方公共団体の財政悪化が進み高校の運営経費、施設設備費等の緊縮により、経費のかかる専門学科の定員がまず削減の対象にされる。専門学科の閉校、統廃合、総合学科への再編など、専門学科を取り巻く環境が変化してきている。

5つに、経済的格差の拡大化の進行がある。高校卒業後の進路選択に多大の影響を及ぼしてきている。専門学科に学ぶ生徒もこの影響下にある。大学等への進学には、家庭の経済的条件により困難な状況もみられること。

もちろん、こうした専門学科を取り巻く諸状況を考えて、当初の設置目的から考えると専門学科における教育は一定の危機的状況にあるともいえる。今日の専門学

科の教育を考える時、教科書に即し、マニュアル通りの指導法で教育をおこなえば十分だという状況にはない。

こうした問題意識から専門学科における教育の置かれた現状を明らかにし、解決を求められている課題を導き出し、課題の内容把握を試みる。

そこで、専門学科を取り巻く問題や現状を考えるために、専門学科高校の校長が学校経営の責任者として、現状をどのように認識しているかについて、その意見や考え等を聴取することにした³⁾。そのデータを基に、専門学科高校の教育の現状を解明しながら、校長の認識する専門学科高校の問題状況を探ることにする。

本稿では次の6つの点をデータに即して明らかにする。

1つは、校長は生徒の現状をどのように把握・理解しているのか。校長がみた生徒の現状を検討する。

2つは、校長は専門学科の現状(役割)をどのようなものと理解しているのか。

3つは、専門学科高校の学校経営・運営の課題を探る。

4つは、専門学科で重視される職業的資格取得をめざした教育の位置づけと就職指導の現状を探ることである。

5つは、生徒の特徴、および専門学科高校の学校経営の課題との関連において、専門学科高校の教員に求められる指導力(資質能力)の特徴を探ることにする。

6つは、保護者や社会、生徒とのかかわり方の特徴を探ることである。

2. 調査方法 —調査対象と回答高校の概要—

文部科学省の調査(『学校基本調査報告書』)によると、平成23年度の公立高校(本校)は3,632校、その内、単独校(1学科設置)で、全日制が2,209校、定時制が112校、全定併置校が275校、総合校(2学科以上設置)で、全日制が800校、定時制が34校、全定併置校が202校。専門学科数(公立)は、2,039。その内訳は、全日制が1,822、定時制が66、全定併置が151である。

調査は質問紙を用いて郵送法で実施した。調査対象は公立全日制高校の中で専門学科を設置している高校の校長である。定時制と通信制は調査では含めていない。

調査時期は2012(平成24)年2~3月。調査対象校は1,100校である。有効回答数は591名、その有効回答率は53.7%。なお、有効回答以外に、記入漏れ等の不備、閉校予定の高校とか、専門学科を設けていない高校への誤送付による返送等の回答が7校。まず、調査回答校の概観をしておく。

調査回答校(591校)を概観すると、次の通りである。

・学科構成は

1. 専門学科のみの設置	74.0% (437校)
2. 普通科との併置	22.7% (134校)
3. 総合学科との併置	3.0% (18校)
4. その他	0.3% (2校)

なお、「1. 専門学科のみの設置」(437校)高校とは、〇〇工業高校、〇〇商業高校、〇〇実業高校、〇〇農業高校等の名称を冠する専門高校で、回答校全体の74.0%。

・設置されている専門学科

(設置学科) (591校に占める比率)

1. 工業に関する学科	39.9% (236校)
2. 商業に関する学科	38.4% (227校)
3. 農業に関する学科	24.5% (145校)
4. 家庭に関する学科	14.2% (84校)
5. 福祉に関する学科	4.7% (28校)
6. 水産に関する学科	3.9% (23校)
7. 情報に関する学科	3.7% (22校)
8. 看護に関する学科	1.4% (8校)
9. その他	2.2% (13校)

回答形式は、例えば、工業科と商業科を設置する高校には、1と2が該当。普通科と家庭科を設置する高校は、4が該当。工業科と商業科の設置校が多いことがわかる。

・勤務校の2000年以降の改革

1. 複数高校が統合、新設校として発足	13.1% (77校)
2. 学科等の再編を実施	39.8% (235校)
3. 90年代に統廃合又は学科等の再編	19.2% (113校)
4. 過去20年間学科等の再編はない	25.1% (148校)
5. その他	2.9% (17校)

高校改革が90年代に始まったが、2000年以降に改革(再編)した高校(1と2に回答)は、合計52.9%を達している。専門学科の改革(再編)が進んでいる状況がわかる。

3. 校長からみた専門学科の生徒の特徴

1) 在籍生徒にみられる特徴

校長は勤務高校の専門学科に学ぶ生徒の特徴をどう把握し理解しているのか。調査票では、生徒の特徴を設定した23の質問項目毎に、自校の生徒がどの程度あてはまるかを尋ねた。回答形式は「とてもあてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の4件法で求めた。そして、因子分析をおこない、

3つの因子をみいだした。3つの因子別に23の質問項目を整理し表示した（表1参照）。

第1の因子は「生徒の生活習慣と規範意識」とネーミングをした。次の11個の質問項目が分類される。すなわち「1. 授業をサボり、欠席の多い生徒は少しである」「2. 遅刻は少なく、時間を守って行動できる生徒が多い」「3. 生徒指導で、指導で手を焼くような生徒も少しいる」「4. 教師の指導や指示に従う、素直な生徒が多い」「5. 生徒間のけんか、いさかい、いじめ等の問題は少なく、明るく開放的な高校生活が送れている」「6. 生徒は掃除をきちんと行い、校舎はきれいに使われている」「7. 校則をきちんと守れる、躰のできた自主的な生徒が多い」「8. 高校での授業や生活に満足し、退学生徒は少ない」「9. 授業の進度に対応できずに無気力になる生徒は少ない」「10. 教師と良い人間関係を持てる生徒が多い」「11. 高校時代に、将来の進路を決めることができる生徒が多い」。以上の質問項目が含まれる。この因子は生徒の生活習慣、規範意識、教師及び生徒との人間関係等に関する質問項目から構成されていると考えた。

回答をみると「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の2つの肯定的な比率を合わせると、その比率は高く、3つの質問項目（7、8、9）を除いて80%から90%に達している。生徒の生活面に関しては校長が一定の評価をしている。

第2の因子は「生徒の進学意識と家庭の状況」とネーミングをした。すなわち「12. 卒業後、大学・短大・専門学校への進学を考えている生徒が多い」「13. 経済的には、まあまあ豊かな家庭の生徒が多い」「14. 中学校の成績で、偏差値の高い生徒が入学している」「15. わが子の学習や生活に関心の低い放任的な家庭の生徒は少

ない」「16. 授業に興味を持ってない、学習意欲の低い生徒は少ない」「17. 普段のテストや定期考査の成績の良し悪しに過敏で、親の期待の大きさを強く感じている生徒が多い」等。この因子は、生徒の進学意識、学習意欲、家庭状況等に関する質問項目から構成されている。

回答をみると、先の第1因子への回答とは逆に、「あてはまらない」といった否定的な評価が多い。例えば「12. 卒業後の進学」「13. 家庭の経済状況」「14. 中学時代の成績」「17. 親の子どもへの期待」等で、評価が高いとは言えず、「あてはまらない」への回答が60%を超える。

第3の因子は「生徒の高校生活の送り方及び生き方」とネーミングをした。すなわち「18. 将来の進路意識を明確に持って入学して来る生徒が多い」「19. 自分に自信を持ち、個性を發揮できている生徒が多い」「20. 何事にも積極的に取り組む、指導性を發揮できる生徒が多い」「21. 忍耐力がある地道なことをすることを嫌がる生徒が多い」「22. 部活動に熱心で充実した生活を過ごし思い出を残す生徒が多い」「23. 普段、家でほとんど勉強しない生活を過ごす生徒が多い」等、高校生活の送り方に関する意欲や態度等に関する質問項目から構成される。

回答をみると「18. 進路意識を明確に持って入学する生徒」では、「あてはまる」を選んだ校長はほぼ3人中2人の割合である。なお、「19. 自信を持ち、個性を發揮」「20. 積極的で、指導性を發揮」できていると捉える校長は少なく、「21. 忍耐のいる地道なことをすることを嫌がること」では、否定的な回答の比率が高い。なお、「22. 部活動に熱心で、充実した生活」には肯定的な回答が多いが、「23. 普段、家で学習すること」には否定的な回答が多いといった特徴がみられる。

表1 自校の生徒の特徴

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	%計
1. 授業をサボったり、欠席の多い生徒は少ない	27.2	58.7	13.6	0.5	100.0
2. 遅刻は少なく、時間を守って行動できる生徒が多い	25.3	59.2	15.1	0.5	100.0
3. 生徒指導で、指導で手を焼くような生徒も少しいる	19.8	59.2	19.3	1.7	100.0
4. 教師の指導や指示に従う、素直な生徒が多い	26.4	66.1	7.3	0.2	100.0
5. 生徒間のけんか、いさかい、いじめ等の問題は少なく、明るく開放的な高校生活が送れている	17.6	66.3	15.6	0.5	100.0
6. 生徒は掃除をきちんと行い、校舎はきれいに使われている	26.6	64.1	9.2	0.2	100.0
7. 校則をきちんと守れる、躰のできた自主的な生徒が多い	12.9	59.7	26.6	0.8	100.0
8. 高校での授業や生活に満足し、退学生徒は少ない	16.9	59.5	22.0	1.5	100.0
9. 授業の進度に対応できずに無気力になる生徒は少ない	8.8	60.7	29.8	0.7	100.0
10. 教師と良い人間関係を持てる生徒が多い	20.0	71.4	8.5	0.2	100.0
11. 高校時代に、将来の進路を決めることができる生徒が多い	11.9	69.1	18.0	1.0	100.0
12. 卒業後、大学・短大・専門学校への進学を考えている生徒が多い	3.7	27.5	61.4	7.5	100.0
13. 経済的には、まあまあ豊かな家庭の生徒が多い	1.2	20.3	68.9	9.6	100.0
14. 中学校の成績で、偏差値の高い生徒が入学している	1.0	10.4	61.7	26.9	100.0
15. わが子の学習や生活に関心の低い放任的な家庭の生徒は少ない	4.1	52.2	41.5	2.2	100.0
16. 授業に興味を持ってない、学習意欲の低い生徒は少ない	4.6	55.4	38.1	1.9	100.0
17. 普段のテストや定期考査の成績の良し悪しに過敏で、親の期待の大きさを強く感じている生徒が多い	0.0	13.8	79.1	7.1	100.0
18. 将来の進路意識を明確に持って入学して来る生徒が多い	7.5	58.0	33.7	0.8	100.0
19. 自分に自信を持ち、個性を發揮できている生徒が多い	2.6	37.6	56.9	2.9	100.0
20. 何事にも積極的に取り組む、指導性を發揮できる生徒が多い	2.9	31.9	63.1	2.2	100.0
21. 忍耐力がある地道なことをすることを嫌がる生徒が多い	2.0	29.2	63.3	5.4	100.0
22. 部活動に熱心で、充実した生活を過ごし、思い出を残す生徒が多い	26.1	50.7	22.9	0.3	100.0
23. 普段、家でほとんど勉強しない生活を過ごす生徒が多い	25.9	53.4	18.9	1.9	100.0

注) 質問項目に付している1～23の番号は、質問紙調査で用いた質問項目の番号とは異なっている。

1. 生徒の生活習慣と規範意識
2. 生徒の進学意識と家庭の状況
3. 生徒の高校生活の送り方及び生き方

2) 生徒の生活と学習の現状

次に、生徒の学習や生活の現状をどのように把握し理解しているのか。16の質問項目を設定して、それぞれの質問項目についてどの程度あてはまるかを尋ねた。回答は「とてもあてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の4件法で求めた。因子分析をおこない4つの因子をみいだした。表2は、4つの因子別に16の質問項目を整理し表示している。

第1の因子は「専門学科教育の効用」とネーミングをした。すなわち「1. 演習や実験の授業形式では、意欲や能力を発揮する生徒が多い」「2. 専門学科の専門教科・科目には、実験・実習が多く、体験を通した学習が多いため、理解が深まり知識、技能・技術を身につける生徒が多い」「3. 就職のため、各種の資格取得の重要性に気づき、努力する生徒が多い」「4. 専門学科では、挨拶や礼儀、整理整頓、時間厳守などの職業的態度が身につく」「5. 普通教科よりも専門教科の授業に興味を持つ生徒が多い」「6. 学ぶ中で仕事の内容や意義を理解でき、職業意識が培われる生徒が多い」「7. 職業を主にする専門学科に入学し、進路意識が明確になり、学ぶ内容に興味を持つ生徒が多い」等の質問項目が含まれた。専門学科での実験・実習といった授業形式の一般化、職業資格取得をめざした学習、職業的な態度や意識の形成等に関する質問項目から構成されている。

回答をみると、いずれも質問項目でも「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を合わせた比率は、90%前後の高い比率である。校長は生徒の現状について非常に高い肯定的な評価をしている。

第2の因子は「専門学科教育の困難性」とネーミングをした。すなわち「8. 入学生徒の学力が必ずしも高くないため、補習教育を実施しながら、高校の授業を進めていくことが必要な生徒が多い」

ていくことが必要な生徒が多い」「9. 専門教科・科目は内容が高度なので、中学校の時に十分な学力を身につけていない生徒は、学習に遅れがちになる場合が多い」「10. 自分の将来の進路を深く考えず、周りに進められて入学して来る生徒が多い」「11. 専門学科での学習を基礎に、さらに大学等への進学を考えている生徒が多い」「12. 専門学科の生徒でも、職業に取り組む真剣さやまじめさなどの職業的資質や態度を身に付けさせることは難しい」等。専門学科での学習の状況、進路意識、職業的資質・態度の形成等に関する質問項目から構成されている。

回答をみると、中学校時代の学力の形成に関する問題点を認め、補習教育の必要性等を認める評価が60%に達している。中学校時代における学力水準の程度に少し厳しい評価がみられ、明確な進路意識を持って専門学科高校に入学したと捉える校長は半数を下回るが、専門学科の教育を通しての職業的資質や態度の形成という点では60%以上の校長が肯定的評価をしている。

第3の因子は「専門学科での進路意識の明確化」とネーミングをした。すなわち「13. 専門学科で学んだ内容に高い関心を持ち、一生の仕事と決める生徒が多い」「14. 卒業後、専門学科での学習成果を生かせる職種への就職を旨とする生徒が多い」。この2つの質問項目は専門学科での学習の成果を職業選択に関連づけるものである。

回答をみると、学習の成果を生かして一生の仕事と考えるような明確な進路意識の形成がみられると評価する校長は約6割弱であり、学習成果と職業選択は一定程度関連づけていると捉える校長は約7割である。

第4の因子は「専門学科教育の機能不全」とネーミングをした。すなわち「15. 入学後、専門学科での学習を、

表2 生徒の学習や生活の現状

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	%計
1. 演習や実験の授業形式では、意欲や能力を発揮する生徒が多い	24.9	65.6	9.5	0	100.0
2. 専門学科の専門教科・科目には、実験・実習が多く、体験を通した学習が多いため、理解が深まり知識、技能・技術を身につける生徒が多い	28.0	67.9	3.7	0.3	100.0
3. 就職のため、各種の資格取得の重要性に気づき、努力する生徒が多い	41.0	53.2	5.8	0	100.0
4. 専門学科では、挨拶や礼儀、整理整頓、時間厳守などの職業的態度が身につく	32.5	56.0	11.1	0.5	100.0
5. 普通教科よりも専門教科の授業に興味を持つ生徒が多い	25.3	70.8	3.7	0.2	100.0
6. 学ぶ中で仕事の内容や意義を理解でき、職業意識が培われる生徒が多い	15.1	74.6	10.2	0.2	100.0
7. 職業を主にする専門学科に入学し、進路意識が明確になり、学ぶ内容に興味を持つ生徒が多い	12.9	69.5	17.3	0.3	100.0
8. 入学生徒の学力が必ずしも高くないため、補習教育を実施しながら、高校の授業を進めていくことが必要な生徒が多い	12.8	49.4	34.2	3.6	100.0
9. 専門教科・科目は内容が高度なので、中学校の時に十分な学力を身につけていない生徒は、学習に遅れがちになる場合が多い	7.1	50.3	39.5	3.1	100.0
10. 自分の将来の進路を深く考えず、周りに進められて入学して来る生徒が多い	6.1	52.2	40.0	1.7	100.0
11. 専門学科での学習を基礎に、さらに大学等への進学を考えている生徒が多い	5.4	31.9	58.8	3.9	100.0
12. 専門学科の生徒でも、職業に取り組む真剣さやまじめさなどの職業的資質や態度を身に付けさせることは難しい	2.4	34.7	55.4	7.5	100.0
13. 専門学科で学んだ内容に高い関心を持ち、一生の仕事と決める生徒が多い	8.1	49.7	40.7	1.5	100.0
14. 卒業後、専門学科での学習成果を生かせる職種への就職を旨とする生徒が多い	20.2	56.2	22.6	1.0	100.0
15. 入学後、専門学科での学習を、自分の学びたかったことではないと考え直し、進路を変えたり、進路を変えようとする生徒が少しはいる	1.5	42.5	48.6	7.3	100.0
16. 専門学科の高校に入学したにもかかわらず、その専門分野の授業に興味を示さない生徒が少しはいる	4.4	66.2	27.4	2.0	100.0

注) 質問項目に付している1～16の番号は、質問紙調査で用いた質問項目の番号とは異なっている。

1. 専門学科教育の効用
2. 専門学科教育の困難性
3. 専門学科での進路意識の明確化
4. 専門学科教育の機能不全

自分の学びたかったことではないと考え直し、進路を変えたり、進路を変えようとする生徒が少しはいる」「16. 専門学科の高校に入学したにもかかわらず、その専門分野の授業に興味を示さない生徒が少しはいる」の質問項目が含まれ、専門学科教育への不適応や提供される学習内容への興味・関心の低下等に関するものである。

回答をみると、専門学科に在籍して学ぶ生徒の中に一定程度、専門教育に興味や関心を持って、進路変更を考える生徒の存在を認める数値である。進路を変えようとする生徒の存在を認める校長は約4割強、授業に興味や関心を持っていない生徒の存在を認める校長は約7割である。

4. 自由記述欄にみられる専門学科の役割と課題

本節では、専門学科の役割と課題について、校長はどのように把握し理解しているかをみていく。自由記述の回答形式を用いて、校長が考える専門学科教育の現状や役割、良さや問題点について、具体的にどのような指摘をしているかをみていく。

まず、専門学科の現状や役割、良さ（利点）をどのように捉えているのか。4点にまとめて示すことにする。

1つは、専門学科教育の役割とか成果として、実践的な知識・技術を身につけた人材の輩出に関する指摘。

「県立高校として県内に多くの即戦力を持つ人材を輩出していくことが使命です。」

「フリーターやニートなどを防ぐ面から専門高校の意義や役割は大きい」

2つは、専門学科の教育内容や教育活動から得られる成果や良さに関する指摘。

「中学校時、普通科目で付いていけなかった生徒も新たな専門科目を学習することで、学習への意欲が高まる生徒がいる。また、実習、実験など体験的学習により、職業観を身に付けさせることができる。」

「勉強には熱心ではない生徒が多いが、職員との人間関係を作り上げ、よい生徒に育てている。多くの発表会で入賞し自信を持つようになってきている。(商業、農業)」

「普通科では体験できない「ものづくり」や「商品開発」「販売活動」などを通してより実践的な力を養うことができる。(商業)」

「中学校時代に学習（普通科目）アレルギーをもって、いる生徒が専門学科で新しい科目に出会って、心に灯がつく場合が多い。「できる、わかる」という手応えを専門科目から与えられる。」

「農業高校では花や野菜を育て家畜を飼育する。命の教育を実践できる点は他の高校にない魅力である。」

「ものづくり技術の習得や資格取得により、日頃の学

びの成果が目に見える形で表れるので、学力の向上を実感できる。(工業)」

「農業高校は教育の原点である。我が国の伝統文化が農業や農村社会から発展してきたが、古き良き時代の日本、日本人の心を取り戻すにはもはや農業教育しかない。」

「「ものづくりは人づくり」実習や課題研究などの授業や資格取得、様々な行事を通して人間的成長を目指す」

3つは、就職指導における成果に関する指摘。

「特に工業科においては、厳しい時代にあっても、なんとか就職での実績を残すことができている (工業)」

「働くことを先延ばししている若者が多いなか、就職率が高い専門高校の果たす役割、意義は大変大きなものがあると自負している。」

4つは、社会に有為な人材の輩出に関する指摘。

「社会人として自立できる人間の育成が求められる。具体的には、元気が良いこと、挨拶ができること、基本的な生活習慣が身についている、ルールを守ること、友人が多いこと等をクリアできる人間の育成が役割。(工業)」

「授業だけでなく教育活動全般にわたり基本的な生活習慣やマナーなど社会人としての必要な力（人づくり）を体験的に理解させる教育を行っている点。(商業)」

「各専門学校は社会で自立できる人を育てることが目標と思います。生徒に自信と意欲を付けてやれば、自分が伸びていきます。各校の特色を伸ばしていければ良いと思います。(農業)」

「農業高校生は若干学力は低い、磨けば輝く岩石ばかりである。専門教育を通して、食や命の大切さを身をもって学び、知・徳・体・技のバランスがとれている人材育成ができる。日本農業は人の命をつなぐ大切な産業。それを学ぶ人材育成こそ日本の未来を支える。自信と誇りを持たせる熱血教師がほしい。(農業、北海道)」

次に、専門学科が抱える課題や問題点に関してはどのように捉えているのか。8点にまとめて示すことにする。

1つは、老朽化した実習等の設備の更新に関する指摘。

「県予算の関係で農場設備の改修費用が不足している中、なんとか授業を展開している。(農業)」

「実習設備が老朽化、設備更新が急務である。(工業)」

2つは、専門学科の良さが、中学校の進路指導担当教師とか、企業等の産業界、あるいは地域社会から十分に認知されていないということに関する指摘。

「中学校の教師、学習塾関係者が専門学科に関する情報に乏しい。専門高校の側から中学校のキャリア教育、進路指導を積極的に支援することが重要。(商業)」

「産業界や企業が専門高校の有為性をアピールしてほ

しい。(工業)』

「進路指導における就職率の高さ、離職率の低さは工業教育の特徴である。各専門学科の取り組みをより広く情報発信するなど、広報活動の充実が必要である。(工業)』

「中学の教員が普通科→地元大学が多く、専門学科に対する理解が余りない。(説明会、広報活動を積極的にしているが) (商業)』

「本校には県内に1つしかない学科ばかり設置されているため、社会全体へのアピールが重要だと考えている。」

「普通科に入れなければ専門学科へという中学の進路指導が相変わらずある。中学校の担任、進路担当者が専門教育を知らない。」

「一般的には、普通科志向が根強く専門高校の特色が十分に理解されていない。」

「商業教育は具体的な「モノ」ではなく抽象的な「システム」を扱うことが中心であるため、高校の商業の学びのイメージが中学生や保護者、中学校教師に十分理解されていない面がある。(商業)』

「専門高校の良さや理解が社会的に認知されていない現状がある。(工業)』

3つは、産業界の急速な技術革新への対応に関して。

「技術の進歩が目覚ましく、教師の教材研究や技術習得に時間を要することなどがあげられる。(工業)』

「かつての商業教育で指導する知識・技術の多くは企業現場の実務においてそのまま通用するものが多く含まれていたが、産業構造のソフト化、企業の管理システムの電子化等に伴い位置づけが大きく変わってきている。」

4つは、専門学科と大学等への進学との関連に関する指摘。

「大学への入試でもセンター試験が重視される中、試験科目では評価できない良い力を持つ生徒にも進学の道を作ってほしい。」

「特に国公立大の進学に対し、センター試験がカリキュラム上、難しい場面があり、大学進学を希望しても受験できない場合がある。(商業)』

「兵庫県(県立全日制)の商業に関する学科卒業生の進路状況は、進学する生徒の割合が就職する生徒の割合よりも高く、その率も年を追って増加傾向にある。商業教育では、学習の動機付けや学習成果の確認、ステップアップの指標として検定試験に積極的に取り組んでいる。このような成果をもとにさらに大学で経済学や商学・経営学を深く学ぶことを目指す生徒も多く、商業科推薦入試、やAO入試等も活用して進学する生徒も多い。」

「銀行系の金融機関の採用が大卒にシフトし、商業高校の役割が混沌としてきた。進路が多様化し、就職と進

学が半々、四大に2割進むようになっている。専門高校で学び、興味を抱き、さらに深く学びたいと思えば大学に行くのはあるべき姿だと思う。基本的には商業は「人」を売るところ、信頼される「人」を作るところと教えている。」

5つは、専門学科で学んだ知識や技術を生かせる職業に就かないことに関する指摘。

「農業高校で学んだことが将来の進路に十分生かされていない点は問題である。」

6つは、社会や時代の変化に対応した専門学科教育の見直しや改善に関する指摘。

「地域での生徒数減少により入学者の減少。産業の空洞化による製造業からの求人の減少が予想される。」

「商業高校は現在、冬の時代を迎えているように感じる。統廃合等による商業高校の減少、生徒数減、即戦力の対象が大学卒にシフト。しかし、新しい時代に合った、先を見通した商業教育をさらに研究し、高校現場の実践力を高めていきたい。」

7つは、専門学科を担う教員や教育現場に関する指摘。

「専門学科の教員は視野が狭くなりがちで独善的。」

「本校は地域ではそれなりに人気のある高校で地域の人々から理解されている。普通科教員の一部にあまり教科指導に力を入れない教員がいて、全体の足並みを崩している。つまり専門学科高校で楽をしようとする教員(普通教科)がいることが残念である。(愛知、農業)』

「学校評価、教員評価、コンプライアンス、アカウントビリティ等が、それぞれの個別具体的な取り組み事項として教師の多忙化を増している。今必要なのは生徒達とHR担任が向き合える時間の確保であると考え。事務処理、調査、各種会等に忙殺されつつある現状では、本来必要な教育活動が消耗しつつあると感じる。(農業)』

8つに、専門学科の位置づけに関する指摘。

「文科省のデータで普通科：専門学科：総合学科が7：2：1の割合である。工業技術立国としてこれでいいのかとても疑問に思っている。(工業)』

「特に農業高校の全国の定員減少が著しい。農業の大切さと、後継者育成を担う農業高校の重要性の認識と、文科省として農業教育の充実をさらに図っていくべき。」

5. 専門学科高校における学校経営上の課題

1) 学校経営にかかわる取り組み

本節では、学校経営においてどのような目標や課題を重要だと考え、その達成に取り組んでいるかをみていく。ここでは学校経営の分野でも、特に教育内容や活動支援に関連するものに絞り焦点を合わせる。表3に18項

表3 高校経営・運営の目標や課題への取り組み

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	%計
1. 生徒の生活態度が良く、イジメや暴力、盗難のない安全・安心の生活が送れるような指導ができていること	17.5	68.8	13.4	0.3	100.0
2. 「生徒の生活態度が良く、校則もよく守られている」といった、躰を重視する高校という点で評価が高いこと	24.2	53.6	20.2	2.0	100.0
3. 中途退学者が少なく、生徒一人ひとりを大切に、卒業まで、面倒見のよい高校であること	32.1	54.7	12.7	0.5	100.0
4. 部活動に力を入れており、県や全国で優秀な成績を上げて、部活動での高校の知名度を高めること	22.2	45.3	26.6	5.9	100.0
5. 高校生活が楽しく充実したものになるよう体験や行事等に力を入れ、文化祭や体育祭、修学旅行等が盛り上がり、生徒が生き生きとした高校生活を送れること	32.9	61.3	5.6	0.2	100.0
6. 就業体験等を実施し、勤労観や職業観を身に付けさせ、将来設計能力を育てるキャリア教育を充実させること	35.7	57.0	7.3	0	100.0
7. 授業や勉学への一層の学習意欲を高めるために、専門学科の教育に関連した各種の資格を取得させること	53.6	44.0	2.2	0.2	100.0
8. 地元や県外の有力企業・会社への就職実績で優れていることが知られること	29.2	41.9	27.5	1.5	100.0
9. 明確な教育方針や教育理念を持ち、他の高校とは違った、独自の校風づくりができていること	36.3	59.3	4.4	0	100.0
10. 大学との連携（高大連携事業）を進め、大学見学や研究室訪問、大学教員による授業や講演を行っていること	8.6	32.0	39.2	20.2	100.0
11. 国際交流事業をおこない、交換留学やホームステイ等を通じて語学研修や文化体験等を実施すること	4.2	15.8	38.6	41.4	100.0
12. 就職指導だけでなく、進学指導においても、普通科高校や総合学科高校に劣らず、実績を上げていること	11.3	38.1	43.1	7.4	100.0
13. 魅力的な学校設定科目を用意するとか、社会人講師からの体験に基づく授業を設定するとか、教育課程が生徒に好評であること	11.7	60.7	25.6	2.0	100.0
14. 「学習の遅れがちな生徒」に対して、少人数の授業を設けたりし、きめの細かい指導を行うこと	13.1	64.7	21.2	1.0	100.0
15. 中学校の時に、学校に適応できにくかった不登校等の生徒を丁寧な指導し、そうした生徒の就職や進学を十分に支援し、進路指導で実績を上げていること	9.6	55.0	32.1	3.2	100.0
16. 実習や実験など、体験を通して学べる授業を工夫し、職業的興味を高め、落ちこぼれのない指導を行うこと	19.6	73.4	6.8	0.2	100.0
17. 他校に比べて、施設・設備が立派で、冷暖房等も整い、快適な学習の環境が用意されていること	11.9	30.3	40.5	17.3	100.0
18. 校長の指示、助言、指導を、教員が素直に受け入れ、校長主導の教育実践が実現していること	17.7	73.2	8.7	0.5	100.0

注) 質問項目に付している1～18の番号は、質問紙調査で用いた質問項目の番号とは異なっている。

1. 生徒の生活面の充実をめざす取り組み
2. 専門教育の充実をめざす取り組み
3. 特色ある教育の実現化をめざす取り組み
4. きめの細かい指導への取り組み
5. 教育環境の整備と校内組織体制づくりの取り組み

目を示しているが、これを専門学科高校における学校経営の主要な目標ないし課題であると捉えた。そして、この18項目を専門学科高校及び専門学科を置く高校がどの程度取り組んでいるか。先の表1及び表2と同様に因子分析をおこない、次の5つの因子をみいだした。

第1の因子は「1. 生徒の生活面の充実をめざす取り組み」とネーミングをした。すなわち「1. 生徒の生活態度が良く、イジメや暴力、盗難のない安全・安心の生活が送れるような指導ができていること」「2. 「生徒の生活態度が良く、校則もよく守られている」といった、躰を重視する高校という点で評価が高いこと」「3. 中途退学者が少なく、生徒一人ひとりを大切に、卒業まで、面倒見のよい高校であること」「4. 部活動に力を入れており、県や全国で優秀な成績を上げて、部活動での高校の知名度を高めること」「5. 高校生活が楽しく充実したものになるよう体験や行事等に力を入れ、文化祭や体育祭、修学旅行等が盛り上がり、生徒が生き生きとした高校生活を送れること」等。生活態度の良さ、校則の遵守、安全・安心が確保された生活、中退者の少なさ、部活の活発さ、体験活動や行事の成果の高さ等に関する質問項目から構成されている。

各質問項目の結果をみると、いずれも肯定的な評価である。「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を合わせた数値は「安全・安心の生活が送れるような指導」への取り組みが86.3%であるが、他の4つの質問項目への回答率でもほぼ同様の数値である。つまり、ほとんどの専門学科高校では、生徒の生活面の充実をめざす指導については、積極的な取り組みをおこなっている。

第2の因子は「2. 専門教育の充実をめざす取り組み」とネーミングをした。すなわち「6. 就業体験等

実施し、勤労観や職業観を身に付けさせ、将来設計能力を育てるキャリア教育を充実させること」「7. 授業や勉学への一層の学習意欲を高めるために、専門学科の教育に関連した各種の資格を取得させること」「8. 地元や県外の有力企業・会社への就職実績で優れていることが知られること」「9. 明確な教育方針や教育理念を持ち、他の高校とは違った、独自の校風づくりができていること」等。キャリア教育の充実、職業的資格の取得をめざす支援、就職実績、専門高校として特色ある独自の校風の形成等に関する質問項目から構成されている。

結果をみると「6. 就業体験等を実施してのキャリア教育」への取り組みをおこなう高校は多い。取り組みをおこなっている高校が92.7%。他方、「7. 資格取得」をめざす取り組みをおこなう高校は97.6%に達し、ほぼすべての高校が取り組んでいる。なお、地元や県外の有力企業・会社への就職実績を高める取り組みをおこなっている高校はほぼ7割である。

第3の因子は「3. 特色ある教育の実現化をめざす取り組み」とネーミングをした。すなわち「10. 大学との連携（高大連携事業）を進め、大学見学や研究室訪問、大学教員による授業や講演を行っていること」「11. 国際交流事業をおこない、交換留学やホームステイ等を通じて語学研修や文化体験等を実施すること」「12. 就職指導だけでなく、進学指導においても、普通科高校や総合学科高校に劣らず、実績を上げていること」「13. 魅力的な学校設定科目を用意するとか、社会人講師からの体験に基づく授業を設定するとか、教育課程が生徒に好評であること」等。他校とは違った試みに取り組むことによる特色化、例えば、高大連携事業、国際交流事業への取り組み、専門教育に加えての大学等の進学指導実

績、学校設定科目の導入や社会人講師による授業等の質問項目で構成されている。

結果をみると、高大連携事業に取り組んでいる高校は約4割の高校で多いとは言えない。他方、国際交流事業への取り組み、就職指導に加えての進学指導への取り組み、教育課程の編成に関連し学校設定科目や社会人講師の導入等の取り組みは、それぞれ20.0%、49.4%、72.4%の高校でおこなわれている。

第4の因子は「4. きめの細かい指導への取り組み」とネーミングをした。すなわち「14. 「学習の遅れがちな生徒」に対して、少人数の授業を設けたりし、きめの細かい指導を行うこと」「15. 中学校の時に、学校に適応できにくかった不登校等の生徒を丁寧に指導し、そうした生徒の就職や進学を十分に支援し、進路指導で実績を上げていること」「16. 実習や実験など、体験を通して学べる授業を工夫し、職業の興味を高め、落ちこぼれない指導を行うこと」等。進学指導だけでなく就職指導にも力を入れるとか、少人数授業の導入、不登校の問題を抱える生徒への進路指導、体験を通してのキャリア教育の充実等のきめの細かい指導の取り組みに関する質問項目から構成されている。

結果をみると、学習の遅れがちな生徒の指導を念頭におく少人数授業への取り組みは77.8%、不登校ぎみの生徒への丁寧な指導や進路指導への取り組みは64.6%、実習や実験などの体験を通して学ぶ授業の工夫や職業への興味や関心を高める指導への取り組みは93.0%である。この比率にあらわれた取り組みの水準をみる限り、きめの細かい指導、面倒見のよい教育への取り組みは今後とも期待される課題でもある。

第5の因子は「5. 教育環境の整備と校内組織体制づくりの取り組み」とネーミングをした。すなわち「17. 他校に比べて、施設・設備が立派で、冷暖房等も整い、快適な学習の環境が用意されていること」「18. 校長の指示、助言、指導を、教員が素直に受け入れ、校長主導の教育実践が実現していること」等。快適な学習環境の実現や意思疎通が図られた学校経営組織の確立等に関する質問項目から構成されている。

結果をみると、施設設備の条件整備への取り組みをおこなっている高校は42.2%、意思疎通が図られた学校経営組織の確立への取り組みがおこなわれ校長主導の教育実践が実現している高校は90.9%である。前者の数値をみると、取り組みが十分な水準にあるとは言い難い。

2) 学校経営への影響要因 一 教員組織の年齢構成

表3で、専門学科高校が学校経営の諸課題にどの程度取り組んでいるかをみてきた。ここでは少し視点を変えて、近年の顕著な特徴である教員組織の年齢構成の変化が学校経営にどのような影響を及ぼしているかについて

検討することにする。つまり、学校経営への影響要因としての教員組織の年齢構成の変化を取り上げる。

ところで、教員組織の年齢構成は、各県（都道府県）による差異が大きいことはよく知られている。しかし、一定の特徴もみられる。例えば、大都市圏では、1970年前後の教員大量採用の時期に採用された教員の採用が2010年前後に退職期を迎え、1990年代に比して、新規採用教員が大幅に増加した。他方、地方の県では、大量採用の時期は大都市圏よりも少し遅れて1980年前後であり、現在（2015年前後）50歳前後の教員の占める比率が大きい。このために、今後、徐々に採用教員数の増加が予想されるが、それを押しとどめるのが地方に顕著な少子化の進行である。退職教員の実数は増加傾向にあるが、新規採用は少ないという現象が起きている。もちろん、大都市圏でも少子化の影響を受け、採用数の減少が予測されている。

さて、こうした教員組織の年齢構成の変化を校長はどう受けとめているのか。そこで「近年、団塊世代の教員の大量退職が話題になりますが、今後、若い世代の教員の比率が高まることに関して、学校経営上、どのような影響が生じてくると考えますか。」という設問で聞いた。

・影響の受けとめ方	% (学校数)
1. 良い影響が生まれる	16.8% (98校)
2. 良くない影響が生じる	23.8% (139校)
3. 何ともいえない	59.5% (348校)

なお、「3. 何ともいえない」への回答がほぼ6割を占めている。なぜこの回答が多数を占めたかという点、良い影響と良くない影響が同時に存在するからである。良い影響と良くない影響は二者択一的と言うより、一定の条件のあり方でどちらか一方の影響が強く顕在化するだろうと捉える校長が多いことがわかる。

では、どのような良い影響があり、逆に良くない影響があると考えられているのか。

良い影響としては、次のようなことが指摘された。

1つは、学校教育の活性化が図れるという意見である。

「柔軟な発想や行動力を持つ若い世代の教員が本校では、公開授業や出前授業を積極的に行っていて活気が生まれている。(商業、埼玉)」

「ベテラン教師が築いてきた財産を引き継ぎつつ、新たな風を起す力が期待できる(商業)」

「技術の継承面で難しい面が当初はあるが、逆に若い教員の自主・自発的研修体制・意識の向上につながる。専門教育の改革にもなる。(工業)」

「高校生にとって20歳代の教員は兄貴のようで話しやすい。また若い人はエネルギーが違うので改革ができる。(農業)」

「若い教員が増えると、学校全体が活性化する(工業、

商業)」等に代表される。

2つは、若い教師のはたす役割に期待する意見である。

「生徒に年齢に近い若者が生徒の心を掴みながら行事などの運営がうまくいく。新しいことに取り組むには、若者のエネルギーが必要であり、教育内容の変化しやすい時代には大きな力になる。(夢多い若い先生が夢を語りともに成長を期待する) (商業)」

「社会の変化に対応でき、発想も柔軟である (工業)」

「分掌運営等で若い層の活用が図られる (商業)」

「教育の世界で「若さ」は何よりも替え難いものである。子ども達にとって年代の近い先生は近寄りやすく雰囲気も明るくなる (農業)」

「新しい技術を伝えることができる (工業)」

「若い発想で生徒指導や教科指導ができる (農業)」

「若い教員の意欲が高い (工業)」

「進学や就職の古い経験ではない新しい考え方と意欲のある行動に期待できるから (商業)」等に代表される。

3つは、年齢構成の均衡化が図れるという意見である。

「組織が機能するには、ベテランや中堅、若い世代の先生のバランスが大切です。ベテラン・中堅の先生が若い先生を育てる中でお互いに良い刺激や影響が生まれることを期待します (商業)」

「本県の場合、教員の平均年齢が高く、若手教員の登用により年齢構成のバランスが良くなり、教育効果の向上が期待できる (商業、徳島)」等に代表される。

4つは、教育の世界にみられる事なかれ主義とか教育活動のマンネリ化の打破を期待する意見である。

「前例踏襲的な事なかれ主義を打破できる良い機会として捉えることができる (工業)」

「旧体質が改善され新鮮な風が吹き込まれる (工業)」等

5つは、部活動の活性化を期待する意見である。

「運動部を担当できる若い教員が多くなることから、運動部の活性化につながると期待している (商業)」

6つは、教育の変化への対応力を期待する意見である。

「過去の経験が余り役立たず、新しく生徒理解の学びが必要と考える (工業)」

逆に、若い教師が多くなることで、良くない影響が生じるという、次のような意見がある。

1つは、技術継承にかかわる問題である。

「蓄積されたノウハウや技術継承などがスムーズに行われたいのではないか (工業)」

「専門学科で年配の先生が培った技術や指導方法等の引き継ぎは短期間ではできない (工業、商業、農業、福

祉)」

「職業高校においては、実習指導ができるまでには時間がかかる。団塊世代が持っている技術が十分に受け継がれないことが課題である (農業)」

「技術伝承の点で不安があり、現在、各校の実験や実習の実状についてまとめ、各校が利用しやすい資料作りをおこなっている部会も存在する。(愛知、農業)」

2つは、学校の教育力低下が生じるという意見。

「多様な生徒への適切な対応力は、いくつかの校種を体験する中で身に付くものであり、言葉で教えて済むものではないと思います。従って、経験豊かな教員の存在が若い教員達の失敗をカバーしてきたこれまでを考えると、若者中心で学校が平穏に収まるのか心配 (商業)」

「専門教科、特に実習を担当する教員に退職者が多い。若い人材を採用しても、実践できる技術や技能が少ないため大変である。(農業、工業、商業、静岡)」

「経験不足から生徒指導について安易な考え方が多くなる (商業)」

「教科指導力はまだしも、学級経営能力や保護者対応など、経験不足からくる対応不安、トラブル等が心配である。学校全体・組織としての教員養成・対応がますます重要になってくるものと考える」

3つは、若い教員の採用増加は年齢構成の不均衡化をもたらすという意見。

「ミドルリーダー的な教員が少なくなり、学校経営・運営上厳しい状況になると思う (家庭)」

「年齢バランスが悪くなり、教師としての経験や実績が受け継がれていかない (商業)」

「本校のような工業高校は年齢的にバランス良く配置がなされて伝統的に先輩教員が後輩教員を育成するシステムができていたが、今後はそのようなシステムが機能不全を起こし、科の意識づけが生徒、教員ともに希薄になると思われる。(工業)」

「年齢層のアンバランスにより互いに教え、教わり合う関係が崩れ、指導力が育たない可能性がある (家庭)」

4つは、若い教員への不信に根ざす意見である。

「指示待ちの教員が増加すること (自ら他の職員や上司に相談することが少ない)。生徒と深くかかわりを持ち、相互の信頼関係を築こうとまで考えない傾向が既に見て取れる。プライドが高く、上司や先輩からの助言を素直に受け入れない傾向がある。些細なことでも自ら判断せず確認する傾向が強い(若い世代に限らないが) (商業)」

「知識はあるが、実践力や体験が不足している。農場等現場での指導ができない教員が増加している」

「若い世代の教員は多様な生き方や考え方を幅広く捉える経験が不足している。そのため自分の考えを押しつける傾向にあり、生徒掌握に欠ける。先輩教師に教えを

請う態度や保護者との連携に問題が生じやすい。その事が教育現場に大きな影響がある。(工業)」

「生徒指導力や授業力が身に付いていない若い教員が多いため、分掌を決める際に頭が痛い(農業)」

「若い教員が積極的に校務等を担おうとするとはいえない面がある。若い教員に学業的活動外の経験が乏しい。」

「若い世代の教員は生徒と向き合う時間より、パソコンと向き合う時間を大切に。教師間の連携や心の教育に支障がありと感じる。(商業)」

ところで、最も多かった回答は「3.何ともいえない」である。良さも、問題点も、ともに含む次のような意見に代表される。もちろん、既に示してきた意見との重複もあるが。

「若い教員の新しい発想や行動力、さまざまなコミュニケーションツールを活用する力などに大きな期待を寄せる反面、今後ますます増加すると予想される多様化する問題を抱えた生徒や保護者への対応で、経験不足によりトラブルが生じる危険性も大きく、そのための研修にかなりのエネルギーを費やせざるを得ないことが懸念される(農業、商業)」

「基本的に生徒は若い教員から影響を受ける。従って意欲的な教育活動をする若手が増えれば学校全体が活気づく。一方、就職活動を含めて、企業との長年のつきあいがあったベテラン教員の指導がなくなることは、大きな損失である。また技術指導の点では若手はベテランには到底及ばない。(工業)」

「若い教員はコミュニケーション能力特に世代を越えて会話を楽しむ雰囲気が少ない。集団で何かをしようとする意識が薄い。一方、人前で上手に話し、研究授業や研修に前向きに取り組む姿勢がある。(工業、商業)」

「若手教員が多くなることは教育現場の活性化が図られる半面、経験不足から学校経営・運営に支障をきたす心配も予想される。(商業)」

「現在平均年齢が高い状況なので、生徒の年代に近く、感覚・知識において現代的な素養のある年代が指導することで、生徒の受け止め方が向上すると思う。工業技術の継承が確実に行われないと、技術レベルの低下が起りかねない(工業、静岡)」

「一長一短ある。現実対応するのみ。ただ若手教員のエネルギーは学校の活力となるし、ベテラン熟練技術者がいないと痛手ではある。しかし時代の流れに乗って指導することも重要。(工業)」

ところで、定年退職を含む退職教員の増加に伴う若い教師の増加という図式のもとで、教員の年齢構成の変化が学校経営に及ぼす影響について意見を求めてきた。し

かし、この年齢構成の変化という現象がどの地域においても生じているわけではない。少子化による就学生徒数の減少、学校の統廃合が今日急速に進んでいる。

例えば、2000(平成12)年度の高校1年の生徒数は⁴⁾、総数1,374,708人、その内、公立全日制956,085人。高校(本校)数は5,345校(全日制4,534校、定時制130校、全定併設681校)、公立校に限れば、4,018校(全日制3,256校、定時制120校、全定併設642校)。公立高校の本務教員数(養護教諭、養護助教諭、栄養教諭、講師を除く)は、192,843人。なお、私立高校のそれは56,946人。

2015(平成27)年度の高校1年になると、生徒総数は1,089,545人、その内、公立全日制732,610人。高校(本校)数は4,851校(全日制4,220校、定時制149校、全定併設482校)、公立校に限れば、3,518校(全日制2,917校、定時制145校、全定併設456校)。公立高校の本務教員数(養護教諭、養護助教諭、栄養教諭、講師を除く)は157,736人、私立高校のそれは51,569人。

この数値から、2000年度から2015年度までの15年間におけるデータをみると、生徒総数で285,163人の減少、その内、公立全日制で223,475人の減少、公立高校(本校)数は500校の減少。公立高校の本務教員数は35,107人の減少である。こうした高校生の減少(少子化)に伴う高校数の減少、教員数の減少が進み、退職者が増加しても新規の若い教員の採用が増加しない現実も生まれている。例えば「本県では40歳まで採用試験の受験が可能であり、必ずしも若い教員の採用増となっておらず、30歳代の採用実績となっている。(商業、山口)」等の採用実績に基づく指摘もある。

また、定年退職後の再任用制度も導入され影響を及ぼしている。この影響は次のような指摘からわかる。

「本県では団塊世代の退職者の再任用により、若い世代の教員を目指す人材が教員採用されず、優秀な人材をみすみす他県に流出させている現状を憂う。(商業、愛媛)」

「本県は退職後の教員をそのまま臨時的任用講師として採用している。そのため若い世代の教員の比率は高まっていない。(工業、福井)」

「若い世代の大量採用とはならない。(講師をして4～6年位の経験者が採用されている)(商業、長野)」

「教員の大量退職はあるが、採用そのものは少なく、また採用される教員が若い者とは言えず、長年講師をしている者の方が多い(農業、家庭、三重)」

「本校の場合、平均年齢が高く、今後、定年退職し、再任用により継続して勤務する教員が増えそうで、若い世代の教員の比率が高まるかは不明である。(工業、熊本)」

「若い世代の正規教員採用補充計画・予定がみえず不安な面がある。正規採用教員数が退職教員数より大幅に

少なくなる。(工業、山梨)」

「現在工業科職員の平均年齢は50歳を超えている。若い力が必要であるが、再任用などにより採用がないと活力が不足する状態になる。(工業、佐賀)」

「県の採用予定は増える見込みは少ない(農業、福祉、宮崎)」等。

さらに、各県の教員の人事異動方針を課題にあげる校長もいる。例えば「県南端の高校であり、採用4年目(2校目)の教員が配置される場合が多い。中間層が少なく、意欲的に頑張ってくれる若手教員の力をいかにシステム化し、伝統の力としていくことができるかが課題である。(多くは3年で転任)(商業)」 「若い教員の異動年数が4年と短く、学校に慣れて戦力になりかけたときに他校に異動してしまうのが痛い。(商業、東京)」等。こうした課題も加わり、学校経営への影響要因としての教員組織の年齢構成のあり方は重要な課題ともいえる。

6. 専門学科における職業的資質の形成と就職指導

1) 専門学科における資格取得の位置づけ

次に、専門教育の特徴ともいえる資格取得に関して、校長はどのように把握し理解しているのか。学校要覧とか学校案内をみると、年間計画に資格取得を位置づけて、どのような資格取得を目指すのかを明記し、資格取得目標を教育課程に位置づけて、何年次に〇〇資格を取得するのが望ましいと、資格取得を専門教育の目標としている高校も珍しくはない。

専門学科では生徒が取得できる資格は実に多い。例えば、ほとんどの専門学科高校では、学校案内でどのような職業的な資格が取得できるのかとか。昨年度に何名の生徒がどのような種類の資格を取得したのかとか、その取得者数も丁寧に掲載している。

専門学科高校が取得可能な資格として、工業科の機械科では機械加工技能士普通旋盤作業(〇級)、危険物取扱者(〇種)、ボイラー取扱等、土木科では、測量士、土木施工技術者等、電気科では電気工事士(〇種)、電気工事施工技術者、電気主任技術者、特殊無線技士等、建築科では建築施工管理技術、建築CAD検定、インテ

リア設計士、測量士補等、化学工学科ならボイラー技士、高圧ガス責任者等。

商業科では日本商工会議所主催(日商)簿記検定〇級、販売士検定〇級、全国商業高等学校協会主催(全商)簿記検定、情報処理検定、全商ワープロ実務検定、全商英語検定、経済産業省主催基本情報技術者試験、初級シスアド試験。

農業科では危険物取扱者、毒物劇物取扱責任者、農業クラブ検定、食生活アドバイザー基礎検定、簿記検定、情報処理検定、小型車両系建設機械、園芸検定等、実に多くの種類の資格に関する情報を提供している。

そこで、表4は、勤務校の専門学科の教育で、各種の資格取得をどう位置づけているかを聞いた。選択率の最も高いのは「1. 就職の際にも役立ち、専門学科の重要な教育の柱と位置づけている」で41.7%。次いで「2. 就職の際に役立つかどうかはともかく、生徒の学習成果として身近な目標となっているので大切にしている」が39.4%である。そして「3. 資格取得は重要だけれども専門学科の教育の主要な柱ではない」が5.1%。なお、選択肢を1つに絞れないという理由から「その他」も13.8%。

学科別に、違いがみられるかを検証すると選択肢1の比率が高いのは工業科(47.5%)、情報科(45.5%)、商業科(43.6%)の順である。例えば、工業科の校長の考え方、「専門学科在籍生徒は資格取得等に取り組み学習していく中で職業的資質や態度を身に付けていっている。将来の就業への意識高揚にもつながっていると感じている。」に代表される。他方、選択肢2の比率が高いのは農業科(52.1%)、家庭科(43.4%)、水産科(39.1%)である。同じ資格取得といっても各学科における資格取得の位置づけ方に少し違いがあることを理解できる。

2) 勤務校での就職指導の悩みや課題

本節で、高等学校卒業後の進路としての就職にかかわる問題を検討していく。まず、進路を考えていく際に親(保護者)の職業を継ごうとする生徒がどの程度いると理解しているのか。

表4 資格取得

	% (実数)
1. 就職の際に役立ち、専門学科の教育の重要な柱	41.7 (245)
2. 就職の際の有用さはともかく、生徒の学習成果として身近な目標になっており、大切である	39.4 (231)
3. 重要だけれども、専門学科の教育の主要な柱ではない	5.1 (30)
4. 教育課程の枠外の教育で、部活動のような位置づけ	0 (0)
5. その他	13.8 (81)
計	100.0 (587)

・親と同じ職業（職種）や家業を継ごうとして専門学科に入学する生徒の比率

(継承意思率)	(継承意思率別比率)
1. ほとんど全員	0.2% (1校)
2. 8割程度	0.5% (3校)
3. 6割程度	1.0% (6校)
4. 4割程度	1.2% (7校)
5. 2～3割程度	12.2% (72校)
6. 1割未満	52.6% (310校)
7. わからない	32.3% (190校)

専門学科への入学と、親（保護者）の職業を前提とした進路選択とはほとんど関連性がないと捉えている。

・平成24年3月の就職希望者の就職率

(就職率)	(就職率別比率)
1. 100%	62.2% (362校)
2. 95%～99%	19.6% (114校)
3. 90%～94%	8.4% (49校)
4. 80%～89%	5.8% (34校)
5. 80%未満	4.0% (23校)

就職希望者で就職できた生徒の比率であるが、ほとんどの生徒が希望を叶えている。

・平成24年3月卒業生に占める企業等の就職者の比率

(就職率)	(就職率別比率)
1. 65.3～92.8%	25.7% (152校)
2. 50.9～65.2%	25.0% (148校)
3. 36.6～50.8%	24.5% (145校)
4. 0～36.4%	24.7% (146校)

専門学科高校の卒業生に占める就職者の比率である。就職率を基に4区分をおこなって表示したが、1の区分の高校は、就職者が「65.3～92.8%」を占める割合が大きな高校である。逆に、4の区分の高校は「0～36.4%」であり、就職者の占める割合が小さい。そして、就職者が半数を占める高校とそうでない高校に二分されていることもわかる。

ここで、就職指導に関して、どのような悩みや課題を専門学科高校が抱えているかを、自由記述で意見を求めた。それを整理分類すると、次の6つに分けられる。

1つは、就職希望が地元にある場合の悩みや課題。

「地元希望者が多いが、求人数が少ない。」

「地元企業から多くの求人をいただいているが、生徒が希望する職種（事務職）には、いただいた求人だけでは生徒の希望を満たすことができない状況にある。今年も職安との連携のもとに、なんとか全員の希望を満たすことができたという状況です。今後、より多くの企業に受験のチャンスを与えていただきたい。（商業）」

「地元の就職先が限定されており、希望する職種（特

に専門性を生かした職種）へ就職できる比率が低い。」

「地元での求人が少ない（女子が63%を占めており、本人、保護者ともに地元志向が強い）。（農業、北海道）」
2つは、就職試験に際しての生徒の課題である。

「生徒は学力が低いことで、筆記試験のある企業を避ける傾向にある。」

「学力試験を課す企業が増え、基礎学力の定着、学力の向上をいかに果たすか。」

「生徒が自主的に就職活動に取り組めるだけの動機づけが不足している。」

「欠席日数の多い生徒や部活動未加入の生徒が多く、企業が希望する生徒に該当しない生徒が多い。」

「個々の生徒の能力や希望に合わせた指導が必要ですが、就職先（求人）と必ずしも一致しない。」

「生徒の基礎学力の不足。コミュニケーション能力の低下。自宅通勤を望む生徒が大半を占める。（工業）」

「基礎学力が低い、仕事はよくやる。採用試験時、学力だけでなく、人物をよく見てほしい。（商業、農業）」

「コミュニケーション能力や自己PR力に欠ける生徒が目立つようになった。高卒から大卒に切り替える企業が目立つ。（商業）」

3つは、専門学科で学んだ教育内容を生かせる就職。

「専門を生かす就職口が少ない。あってもかなり遅くなってからのため対応できない。」

「生徒の希望する職種の求人が十分でないこと。」

「専門学科の学びを活かすことができる職場が少ない。」

「大規模な金融系の企業の求人がない。大規模企業の事務系の求人がない。（商業）」

4つは、企業への学校推薦にかかわる課題。

「学科間に学力差がある場合の校内推薦順位の調整の仕方について」

「特定の企業に希望が集中する。（農業）」

5つは、生徒サイドの就労意識の問題。

「就労意識の低下と、仕事に働きがい、やりがいや夢等を求め、生きるために働くという意識がない。」

「生徒自身の進路意識を高めるための具体的な方法がない。ガイダンス、講話等はタイムリーに実施はしているが、目立った効果はみられない。」

「生徒並びに保護者の意識と学校側が客観的な評価をして就職指導をする場合の双方のずれが生じるケースが近年多く出てきている。（農業）」

6つは、就職指導・支援における教員体制の問題。

「教員が企業訪問して情報を得ることが時間的にできない。企業の業務内容等を理解していない。（工業）」

7. 専門学科教員に求められる指導力

本節では、専門学科の教員に求められる指導力（資質能力）をみていく。特に普通科目を教える普通科の教員と対照し、検討する。設問のねらいは専門学科（専門教科・科目）を教える教員と普通科（普通教科・科目）を教える教員に求められる指導力に差異があるかどうかを明らかにすることである。

表5は、専門学科の教員に求められる指導力として17の質問項目を設定し聞いた。質問項目の構成は、生徒との関係づくりの中で期待される指導力、大学受験や就業体験など進路指導で求められる指導力、生徒の学力向上や教科内容で求められる指導力、変化する教育の動向に対処・対応できる指導力等からなっている。いずれも高校教師の指導力として要求されるものと想定した。

これらの各質問項目について、次の4つの選択肢への回答を求めた。「1. 専門学科のすべての教員に特に重要だと思う指導力」「2. 専門学科で主に専門教科・科目担当の教員に特に重要だと思う指導力」「3. 普通科高校の教員に特に重要だと思う指導力」「4. 専門学科、普通科を問わず、教員すべてに重要だと思う指導力」つまり、専門学科と普通科の教育を担う高校教員に指導力で求められるものに差異があるかどうかをみようとした。

結果をみると、ほとんどの質問項目で選択されたのは「4. 専門学科、普通科を問わず、教員すべてに重要だと思う指導力」である。調査での仮説では差異が存在すると思ったが、調査データでは、専門教育をおこなう（専門学科）教員と、普通教育をおこなう（普通科）教員との間に、必要とされる資質能力の点で差異がみられない。

ただし、3つの質問項目に関しては、差異が少しみられる。それは「12. 大学受験に向け、多数の生徒が受験する大学の入試問題の検討を進め、傾向と対策に習熟すること」では「3. 普通科高校の教員に特に重要だと思う指導力」への選択率が63.4%と高い。他方、「13. 「課題研究」や「総合的な学習の時間」等を活用し、教科内容を深く学ばせるとか、新しい課題を学ばせるとか」と「14. 就業体験活動（インターンシップ）を企画・調整でき、生徒の進路意識の形成に貢献できること」では、「1. 専門学科のすべての教員に特に重要だと思う指導力」への選択率も少し高く、それぞれ29.3%、30.5%。

しかし、この2つの質問項目の選択率に関しても最も高い数値は、やはり「4. 専門学科、普通科を問わず、教員すべてに重要だと思う指導力」である。こうした結果をみる限り、学科で担当する教科・科目の違いによる求められる高校教員の資質能力には差異が少ない。

8. 保護者や社会、生徒からの信頼

本節では、専門学科教育を担う教師が保護者や社会、生徒からの期待にどのように対処しているのか。

まず保護者や社会とのかかわり方からみていく。表6は「高校が、保護者や社会から信頼を得るためには、どのようなことが大切だと思いますか。あなたの高校で、重要だと考えて取り組んでいるもの」を選択してもらった結果である（3つ以内の選択）。

選択率の高い順に表示している。最も選択率が高いのは「1. 進路指導を充実し、生徒の夢を育て、実現できるように援助・指導していくこと」で68.7%である。職業的な意識形成や職業的な資質能力の形成など、良き職業人の養成といった職業的社会化という視点から、専門

表5 高校教員（専門学科）に求められる指導力

	専門学科のすべての教員	専門学科で主に専門教科・科目担当教員	普通科高校の教員	普通科、専門学科を問わず、すべての教員	%計
1. 学級担任、教科担任として、生徒一人ひとりの生活上、学習上の悩みや問題を理解でき、支援できること	3.6	2.5	0.5	93.4	100.0
2. 生徒の日常的な話題に対応でき、生徒との良好な人間関係を築き、信頼関係を作りだせる力	3.2	3.1	0.2	93.5	100.0
3. 生徒との人間関係を築き、情熱を持って、行事や体験活動や部活動の指導に取り組めること	4.8	2.0	0.7	92.5	100.0
4. 学校で生徒への基本的な生活習慣（挨拶、服装、遅刻や授業中のなかめけ等）の指導等ができること	5.3	2.4	0.9	91.5	100.0
5. 「学習の遅れがちな生徒」に対して、適切な教材を開発したり、授業のやり方を工夫し、学習を支援する力	3.4	3.6	4.8	88.3	100.0
6. 教師が生徒にわからせたい考えや意見を、生徒から納得できないと反発があっても、最後には説得できる力	5.2	2.8	1.4	90.7	100.0
7. 生徒の進路相談を丁寧におこない、生徒が進みたい進路（就職や進学）を実現していく力	4.9	4.4	0.5	90.2	100.0
8. 正規の授業時間の枠外でも、早朝、放課後、長期休業中等での補習などに積極的に取り組み、生徒の学力の向上を図ること	4.1	3.8	12.5	79.6	100.0
9. 授業で教える教科の内容を、教材の工夫や教育機器の活用によりわかりやすく提示し理解させること	6.0	5.8	1.0	87.2	100.0
10. 生徒の学力に合わせた指導方法を創意工夫できる力（習熟度別の授業方法の工夫）	7.1	3.7	7.3	81.8	100.0
11. 新しい課題に挑戦したり、新しい指導法を導入したり、新しい教材開発を試みること	6.0	7.8	1.2	85.0	100.0
12. 大学受験に向け、多数の生徒が受験する大学の入試問題の検討を進め、傾向と対策に習熟すること	1.4	5.2	63.4	30.1	100.0
13. 「課題研究」や「総合的な学習の時間」等を活用し、教科内容を深く学ばせるとか、新しい課題を学ばせるとか	29.3	13.3	1.0	56.5	100.0
14. 就業体験活動（インターンシップ）を企画・調整でき、生徒の進路意識の形成に貢献できること	30.5	15.7	1.0	52.8	100.0
15. 担当教科とは関係が薄くても、生徒の勤労観・職業観を育て、将来の就業への意識を高めるキャリア教育に積極的に取り組むこと	13.8	6.8	1.2	78.2	100.0
16. コンピュータなどの情報機器に習熟し、授業等で活用し、生徒の学習への興味を高めること	13.0	16.7	1.4	68.9	100.0
17. 担当教科に関する最新の専門的な知識を習得すること	23.5	17.0	0.3	59.1	100.0

注) 質問項目に付いている1～17の番号は、質問紙調査で用いた質問項目の番号とは異なっている。

表6 高校が保護者や社会から信頼されるために大切なこと

(3つ以内の選択)

1. 進路指導を充実し、生徒の夢を育て、実現できるように援助・指導していくこと	68.7 (406)
2. 高校の教育の実状や成果を積極的に公表（情報公開の促進）し、よく知ってもらうこと	43.7 (258)
3. 基本的な生活習慣が形成されていない生徒に躰の指導をしっかりとするなど、生徒指導に力を入れること	30.1 (178)
4. 生徒の興味がわく教材を開発したり、実習や実験で体験を通してより深い学びができる等、日々の授業の充実をはかること	29.1 (172)
5. 学校と保護者（PTA等）との交流を密にし、保護者との意思疎通を良くしていくこと	21.5 (127)
6. 授業以外の運動会や文化祭等の学校行事等の場で、生徒の自主性や個性が発揮できるように、教師も深くかかわりながら、生徒の活動を盛り上げていくこと	21.3 (126)
7. 中途退学者を出さない等、生徒への面倒見がよいと言われるほどきめ細やかな指導や援助を行うこと	19.6 (116)
8. 生徒の学力を高めることを第一に考えた教育活動（取り組み）を行っていくこと	17.8 (105)
9. 一人ひとりの教師が社会人としての常識（挨拶、言葉遣い、服装等）を身に付け、社会的な事件となる教師の不祥事・事件（飲酒運転、セクハラ等）を防止すること	14.7 (87)
10. 部活動に力を入れ、県大会や全国大会で生徒が活躍することで、高校の評判を高めること	9.6 (57)
11. 生活の乱れがちな生徒には家庭訪問をするなど、関係を密にし重点的にかかわり、理解を深め、高校への適応指導を進めること	8.5 (50)
12. 校長をはじめ教員が地域の行事に参加したりしながら、地域の人と関係を密にすること	7.3 (43)
13. 教師の授業力や生徒指導力を高めるため、校内研修等を充実させること	6.1 (36)
14. その他	0.7 (4)

注) 質問項目に付している1～14の番号は、質問紙調査で用いた質問項目の番号とは異なっている。

学科教育が担う役割の重要性を評価する意見である。

次いで選択率が高いのは「2. 高校の教育の実状や成果を積極的に公表（情報公開の促進）し、よく知ってもらうこと」(43.7%)である。特に専門学科（専門高校）での教育の実状は、普通科の教育の実状や成果に比べて、保護者や社会に知られていない。また、専門学科の違いによる差も大きい。対社会的な視点で考えると情報公開の促進は重要な課題となる。

専門学科高校の校長の次の考えは専門学科での教育の特徴と保護者や地域社会からの評価を代表する意見であろう。すなわち「専門高校では、座学と体験的学習のバランスが良く、職業観、勤労観やコミュニケーション能力を培った有為な社会人育成ができています。また専門性や資格取得を活かし、就職だけでなく進学にも対応することができています。ただし一般的には、普通科志向が根強く専門高校の特色が十分に理解されていない。また都市部と地方での認識にも大きな差があり、地方では堅実な生活指導も含めて専門高校に対する信頼や期待は高いものがある。」と専門学科の担っている教育的及び社会的役割を表現している。

次に選択率が高いのは「3. 基本的な生活習慣が形成されていない生徒に躰の指導をしっかりとするなど、生徒指導に力を入れること」(30.1%)である。ある校長は人間性を磨く教育を専門学科の教育は担っていると表現している。しつけ、道德教育、人間教育の重要性を指摘する校長は多い。

なお、選択率の第4位は「4. 生徒の興味がわく教材を開発したり、実習や実験で体験を通してより深い学びができる等、日々の授業の充実をはかること」(29.1%)

といった教師の日々の授業研究に裏打ちされた教育活動全般の充実をめざすことである。

他方で「8. 生徒の学力を高めることを第一に考えた教育活動（取り組み）を行っていくこと」は選択率が少し低く17.8%。学力を高める取り組みの推進は普通科に比べるとそれほど重視していないことも予測できる。

次に、生徒との関係性の構築についてみる。

表7では「授業の場で、教師に対する生徒の信頼感はどうのことから生まれるか」を聞いた。8つの選択肢の中から自分の考えに近いものを順位を付けて（2つまで）選んでもらった。

教師と生徒の関係性を特徴づけるものは、信頼関係である。強制的な力（権力）でもなく、経済的な利益（損得）のやりとりでもなく、物の交換でもなく、愛（情）の交換でもない。理念的には生徒からの教師への信頼によって知識や技能の学習も成立する（文化の伝達）。信頼は教育作用を成立させている根源的な基盤である。

わが国の授業風景を象徴する、講義式ないし一斉指導形式のやり方は実によくみられるが、こうした授業を成立させている要因とは何かと考えると、周知のことだが、生徒が教師の話や説明を静かによく聞き、理解に努める学習態度の存在である。生徒が教師の話や説明、発問を素直に受け取ろうとする態度なくしては授業は成立しない。教師が一方向的にしゃべるだけ、生徒は教師の話に耳を傾けず、教師の指示や説明を聞き流す、教室では私語がうるさくて統制のとれた秩序維持がないなどの状況では、望ましい授業が成立しているとは言えない。

そこで、生徒は授業での自らの学習の態度や行動をどのように把握、理解しているのか。授業場面での態度や

行動の違いを手掛かりにして、教師の説明、指示や命令を素直に受け入れている基盤となっている、教師に対して生徒が抱く信頼感を高めることにする。ここでは、信頼感が基盤となっていると考えられる学習の態度や行動のタイプとして、次の8つのタイプを設定した。

1. 教師一人ひとりのもつ人間的魅力に惹かれて、教師を尊敬し、勉強に取り組むことから（個々の教師が備える人間性に対する魅力）
2. 生徒が学ばなければならない教科の専門知識を、教師はすでに十分に学んでおり、十分な知識を持って授業をしているから（教科の専門家としての教師への信頼性）
3. 教師の発問や指名、生徒の応答といったやりとりから、教師と生徒の間に好ましい人間関係が生まれるから（生徒との関係性の深まり）
4. 教師の説明や話をよく聞いて勉強すると、よくわかり、テストの成績が良くなるから（授業者としての教師への信頼性）
5. 熱心に授業を行う教師の態度にふれると、まじめに勉強しなければならないという気持ちが強くなるから（教師から受ける感化、反省性）
6. 「教師の言うことを聞くのはあたりまえ」という気持ちで、生徒は教師に接することは当然のことだから（正当性に基づく教師への対応）
7. 自分の将来のために学力を身に付ける必要があるから。嫌いな教科の授業でも我慢して勉強をしていると、教師への見方が変わり、信頼感も生まれてくるから（学力の必要性）
8. まじめに勉強しないと、教師から注意され叱られ、評価（内申等）が悪くなるから（教師からの強制性・罰則性）

れ、評価（内申等）が悪くなるから（教師からの強制性・罰則性）

9. その他

表7をみると、選択率が最も高いのは「1. 個々の教師が備える人間性に対する魅力」を感じての選択行動である。第1位選択で42.4%、第1位選択と第2位選択を合わせた数値は67.1%に達する。教師が生徒からの信頼感を得る基盤は、教師が備えている人間性に対する魅力であると捉えている。教師の人としてのあり方を信頼の基盤と捉える。

次に選択率が高いのは「2. 教科の専門家としての教師への信頼性」である。第1位選択で32.0%、第1位選択と第2位選択を合わせた数値は60.0%である。

続いて「3. 生徒との関係性の深まり」が、第1位選択で16.7%、第1位選択と第2位選択を合わせた数値は42.8%。

上記の3つの選択肢に比して、他の選択肢を選択している比率は低い。第1位選択と第2位選択を合わせた数値も、どれも10%未満である。

なお、この同じ設問を用いて、実施した普通科と総合学科の高校生を対象とした調査では、少し違った結果がみられた⁵⁾。普通科と総合学科の調査では、両学科とも、選択率が最も高かったのは、「7. 学力の必要性（自分の将来のために学力を身に付ける必要があるから）」であり、次いで「4. 授業者としての教師への信頼性（教師の説明や話をよく聞いて勉強すると、よくわかり、テストの成績が良くなるから）」が高い。ちなみに「7. 学力の必要性」が普通科では、第1位選択で56.2%、第

表7 教師との関係から考えて、授業の場で、教師に対する生徒の信頼感はどうなところから生まれているか？

	第1位選択	第1位と2位の合計
1. 教師一人ひとりのもつ人間的魅力に惹かれて、教師を尊敬し、勉強に取り組むことから（個々の教師が備える人間性に対する魅力）	42.4	67.1(394)
2. 生徒が学ばなければならない教科の専門知識を、教師はすでに十分に学んでおり、十分な知識を持って授業をしているから（教科の専門家としての教師への信頼性）	32.0	60.0(352)
3. 教師の発問や指名、生徒の応答といったやりとりから、教師と生徒の間に好ましい人間関係が生まれるから（生徒との関係性の深まり）	16.7	42.8(251)
4. 教師の説明や話をよく聞いて勉強すると、よくわかり、テストの成績が良くなるから（授業者としての教師への信頼性）	4.3	9.5(56)
5. 熱心に授業を行う教師の態度にふれると、まじめに勉強しなければならないという気持ちが強くなるから（教師から受ける感化、反省性）	1.7	7.8(46)
6. 「教師の言うことを聞くのはあたりまえ」という気持ちで、生徒は教師に接することは当然のことだから（正当性に基づく教師への対応）	0.9	2.6(15)
7. 自分の将来のために学力を身に付ける必要があるから。嫌いな教科の授業でも我慢して勉強をしていると、教師への見方が変わり、信頼感も生まれてくるから（学力の必要性）	0.5	4.3(25)
8. まじめに勉強しないと、教師から注意され叱られ、評価（内申等）が悪くなるから（教師からの強制性・罰則性）	0.0	0.7(4)
9. その他	1.2	2.7(16)
	(575)	(575)

注) 質問項目に付している1～9の番号は、質問紙調査で用いた質問項目の番号とは異なっている。

1位選択と第2位選択を合わせた数値は73.2%。総合学科では、第1位選択で51.8%、第1位選択と第2位選択を合わせた数値は63.8%。また、「4. 授業者としての教師への信頼性」が普通科では、第1位選択で14.6%、第1位選択と第2位選択を合わせた数値は39.1%。総合学科では、第1位選択で12.5%、第1位選択と第2位選択を合わせた数値は31.5%である。この2つの学科の生徒調査では突出して「学力の必要性」が選択されており、大学等への進学を目指す点において、こうした選択がなされたと解釈できよう。

生徒調査では、進学を目的とする少し功利的、手段的な観点から生徒は教師への信頼感が醸成されると考えるのに対して、教師調査では、個々の教師が備える人間性に対する魅力という観点から教師への生徒の信頼感が醸成されると教師は捉えている。つまり、教師と生徒では、教師への信頼感の醸成の基盤に対する考え方にズレがみられる。教師は「1. 教師が備える人間性」と「2. 教科の専門家」を、他方、生徒は「7. 学力の必要性」と「4. 授業者」を重要視している。捉え方の差異が大きい。

おわりに

近年、少子化の進行による高校生数そのものの大幅な減少、社会の変化が高校教育に及ぼす影響、地方における公的な財政基盤の低下、高校生の学習と生活の変化など、専門学科における教育のあり方が問われている。こうした社会的時代的状况のもとで、本稿では、専門学科高校の教育の現状、そして専門学科の役割を踏まえての専門学科が抱える課題の内容解明を試みようとした。

第1に、専門学科高校に学ぶ生徒の特徴をどのように校長はみているかという点から検討を進めた。生徒の生活習慣や規範意識に関してはおおむね肯定的反応である。専門学科への明確な入学意思に関しては少し否定的反応がなされている。生徒の高校生活の送り方及び生き方では部活動を除いて、リーダーシップの発揮、個性の発揮、家庭学習などには否定的な評価が多くなっている。

生徒の生活と学習に関しては、専門学科教育への生徒の取り組みを評価し専門学科教育の効用を認める肯定的な評価がみられる。同時に、専門学科教育を展開する上での生徒の学力の水準、授業進度への対応、進路との関連での専門教育の推進等では、課題を認識する校長がいる。進路意識の明確化や専門学科での教育の困難性も課題として認識されている。

第2に、専門学科の役割と課題について、校長はどのように把握しているかを自由記述回答形式で、校長が考える専門学科教育の現状や役割、良さや問題点を具体的

な意見の整理により明らかにした。専門学科教育の良さや成果を4点に、問題点や課題を8点に整理している。

第3に、高校経営においてどのような目標や課題を重要だと考えて、その達成に取り組んでいるかを検討した。

目標や課題として18項目の取り組みを設定し、統計的分析により5つに整理した。それは生徒の生活面の充実をめざす取り組み、専門教育の充実をめざす取り組み、特色ある教育の実現をめざす取り組み、きめの細かい指導への取り組み、教育環境の整備と校内組織体制づくりの取り組みである。この5つに整理された取り組みの中で最も行われているのは専門教育の充実をめざす取り組みである。また、生活面の充実をめざす取り組みの実施率も高い。この2つの取り組みに比べると、他の3つの取り組みの数値は少し低くなる。なお、特色ある教育の実現をめざす取り組みでは「国際交流事業」の数値が低く、きめの細かい指導への取り組みでは「学習の遅れがちな生徒に対する指導」の数値が少し高い。また、学校経営に及ぼす影響要因としての教員組織の年齢構成を取り上げ、若い教師の採用とその影響についても検討した。

第4に、専門学科における職業的資質形成で大きな役割を担うと考えられている資格取得の位置づけを検討した。工業科、情報科、商業科では就職にも役立ち、専門学科の重要な教育の柱と位置づけている。他方、農業科、家庭科、水産科では就職の際に役立つかどうかはともかく、生徒の学習成果として身近な目標となっていると位置づけている。同じ専門学科でも学科により資格取得の位置づけ方に少し違いがあることが理解できる。

第5に、専門学科教員に求められる指導力を取り上げた。特に普通教科・科目を教える普通科の教員と対照し、検討した。専門科目担当の教員と普通科目担当教員との間で求められる指導力に差異があるかどうかの検討である。17の質問項目を設定して聞いたが、結果をみると、ほとんどの質問項目で選択されたのは「専門科目担当、普通科目担当を問わず、教員すべてに重要だと思う指導力」が選択された。

第6に、保護者や社会、生徒からの期待に教師はどう対処しているか。期待の受けとめ方を検討した。保護者や社会からの信頼は「進路指導を充実」と「高校の教育の実状や成果の公表（情報公開の促進）」が重要と考え、生徒からの信頼感の醸成の基盤は「教師が備える人間性に対する魅力」「教科の専門家としての教師への信頼性」が重要と考えていることが明らかになった。

注)

1) 文部科学省『学校基本調査報告書（初等中等教育機関編）』（平成26年度）参照。

- 2) 例えば、学事出版の雑誌『月刊高校教育』に、2011年（3月号）に「専門高校」を特集している。なお、専門学科高校に関する研究では、高校生の進路（指導）に焦点を合わせ、商業高校に学ぶ生徒を対象とした研究として、酒井朗編『進学支援の教育臨床社会学』勁草書房、2007年。
- 3) なお、専門学科の改革に関する問題や課題に焦点を合わせ、専門学科の魅力、専門学科の役割、専門学科で学ぶ意義、専門学科高校が抱える課題や問題点の現状、取り組む部改革の課題に関する、高校調査を実施しているがそのデータをまとめた報告書が、拙論「高校教育改革と専門学科—高校長を対象とした調査結果から—」『教職教育研究—関西学院大学教職教育研究センター紀要』第14号、2009年、1-13頁。
- 4) なお、データの算出に際しては『学校基本調査報告書（初等中等教育機関編）』に依拠している。
- 5) 生徒を対象とした調査のデータは、総合学科に関しては、拙論「高校生の学習観」関西学院大学『人文論究』第61巻第4号、2012年、51-74頁。及び普通科に関しては、「進学高校における高校生の学習観」『教職教育研究—関西学院大学教職教育研究センター紀要』第14号、2009年、1-13頁。

なお、本調査は、平成23年度科学研究費補助金基盤研究(C)（研究課題番号、22530937）により実施した。

(みなみもと おさお・関西学院大学教授)